木野通信

発行所
京都精華短期大学
京都市左京区岩倉木野町137ノ1
TEL（075）791—6131
編集人　野上芳彦

ことば・ことば

アメリカの黒人フォークから
◎神がひん曲げた河を　人間がまっすぐになんかできやしねエ！
◎荷を積んだ車はギシギシとなり、空っぽの車はガタガタという
◎もしこの苦しみがお金なら、ぼくは百万長者になっているだろう

あらたなる第一歩を

第1回卒業生を送る

友愛と人間尊重の戦士たれ

京都精華短期大学第一回卒業歓送会が去る三月二十一日本学において行なわれた。設立以来、初めての卒業生一八五名を送り出すこの歴史的な日を全ての関係者は待ち望んでいただろう。

旧来の〝式〟の観念を打ち破った新しい試み、それを私達は「卒業歓送会」と名付け、卒業生とともに歓びの中に短かかった二年間をふり返り、そのあらたなる第一歩を祝った。以下、そのいきさつと当日の模様を事務局、杉本さんのルポで追ってみよう。

どこの大学の卒業式とも違う、したがって、この〝会〟がどのように進行してゆくのか、誰にも分からない〝卒業歓送会〟が、笠原さん（倫理学・教授）の司会で始まった。

本学においては〝卒業式〟とはいわずに〝卒業歓送会〟ということ、これは学生と教職員が、いろいろ討議をした結果であることが説明された。このような試みが成功であったかどうか分からないが試行錯誤（実験）を通じて、今後はさらにいいものにしていこう、という呼びかけがあわせて行なわれた。

考えてみれば、普通行なわれている〝卒業式〟は、単なる儀式としてのみ存在し、やるところの内容は人間不在の無味乾燥なものであることは衆知のことである。結局、現在の大学教育のつまらなさを、最後に締めくくるのにふさわしいものとなっている。このような〝卒業式〟を拒否し、各自が主張したいことをいい、やりたいことをやれる自由を完全に保障したうえで、本学の創造を共にした者同志の、最後の人間的交流の〝場〟として〝卒業歓送会〟が設定された。果たして、私たちの意図したことが実現できたかどうか。

続いて、ただ二人の学校側からの挨拶者、岡本学長のことば——

「…学校の成績等は大したものではない。英語が悪かったからといって、そんなものは何でもないことだ。一番大切なことは、友愛の精神・人間尊重の気持を持ち続けることである。そのために、諸君と一緒にわれわれ教職員も誠実に努力してきた。実社会、たとえば、諸君が勤める会社では、友愛の精神を養うようなものは少ないが、その時は挫折せずに、会社を大学のレベルにまで高めるよう戦ってほしい。私たちは、友愛と人間尊重の戦士として、諸君を社会におくる」——。

この学長のことばは、ただの訓辞としてかたづけられない何かを私たちはこの学園で学んだはずだ。

牛皮製の卒業証書

本学の〝卒業証書〟は変わっている。褐色の牛皮に和英両文が金文字で印刷され、学長および主任教授のサインがあるだけで、ハンコなしである。

「あなたが京都精華短期大学において友愛の精神を養い——」で始まる〝卒業証書〟の文章は岡本学長の起草であり、その英訳は、本学英語科の教師である柳島、シファート、小野、宇田さんたちによってなされたものである。〝証書〟のデザインは、高島、坪内さん（デザイン・講師）が担当した。

従来の〝卒業証書〟は大学を卒業したことを証明することにのみ商品価値が存在した。

今日、大学にとって〝卒業証書〟が必要であるかどうかは速断しかねるが、それを作るという前提にたてばどのようにしたら良いか、私たちは議論を沸騰させた。いろいろな意見がでた。

本学の基本的教育方針である、〝自田・自治主義〟は結局のところ〝人間尊重ということにいきつく。「友愛の精神を養う」ことも〝自田・自治主義〟を基礎にすえなければ不可能なことである。とすれば、本学の〝卒業証書〟は、大学の卒業を証明することもさることながら、そのような教育を共に学んだというところにポイントがおかれねばならないのである。さらにまた、この一枚の〝証書〟を媒介にして、本学園と卒業生の諸君とは、深い人間的かかわりあいが続けられるであろうという、内外への宣言でもある。

留年生大いばり

したがって、私たちの〝卒業歓送会〟は、卒業しようとしている者に序列をつけて、成績優秀者を賞めたたえる場ではない。

在学生代表の送辞もなければ、卒業生代表の答辞もない。勿論、形式的な祝辞もない。私たちの〝卒業歓送会〟の当然の進行として、発言したい人がいれば誰でもよろしい。資格は問わない。やりたいことがあれば何でもよろしい、自己の責任においてやればよろしいということになる。

このあたりから、この楽しい（大変むつかしい）〝会〟の進行は深作さん（文化人類学・教授）にバトンタッチされた。

卒業生の一人が、二年間の学生生活を省みて、自己批判を兼ねながら、本学の〝自田、自治主義〟を幻想だと批判する。むつかしい問題である。しかし今後とも、私たちが問い続けていかねばならない責任があることはいうまでもない。

在学生・卒業生の区別がつかない。次々と歌がでる。発言もある。病気がちだった伊谷先生が元気な姿でマイクの前に立たれた。

「壁にぶっつかった時、これを克服しようとする姿勢こそ重要でこの気持を持って、これからの己れの道を歩み、人生を全うしてほしい」——。と語られた。（伊谷先生の元気な姿に接したのは、私達にとってこれが最後となった）。

飛び入りの父兄が、卒業生諸君に人生訓を論じる。若手の教師が歌う。中でも坪内さん（デザイン・講師）の「網走番外地」には拍手が群を抜いて多かった様だ。

留年の男子学生がきわどい歌を披露。私たちの大学は変な大学である。留年生が大いばりで〝卒業歓送会〟に出席するのである。もちろん彼等を拒む空気はみじんもなく、彼等もまた臆するところがない。あるのは、本学で二年間共に過ごした精華短期大学の創造の共有感だけである。わが大学では、留年するということは、恥かしいことではないのである。

パーティも最高潮になったところで、深作門下の同志社大学生のフォーク・シンガー豊田さんが熱演する。馴染の曲がでると自然に合唱となる。

いよいよ〝卒業歓送会〟も終了に近づき、全員がフォークの「ウィシャル・オーバーカム」から「友よ」をくりかえし合唱した。吉富さん（デザイン・助教授）演出の会場に飾られた花を一本ずつ手にしながら、卒業生も、在学生も、父兄もそして教職員も「友よ！」と声を限りに歌いながら退場して行く。司会の深作さんが「学長、ひとこと」。ちょっと考えた岡本学長は「さよなら」と本当にひとこと。

本学には、いわゆる校歌というものがない。校歌はいくつあってもいいという考えから、改まってこれが校歌だと定める必要を感じないからである。誰かが良い歌を口ずさんでおれば、自然に人々に引きつがれて校歌になろうという考えでもある。本学には校章も校旗もない、デモの時など精華の旗はいく種類もある。またデモのたび毎に精華の旗は違うのである。極端にいえば精華の旗は精華人の数だけあるということになる。これでいいのだという考えが、わが精華短大では何の抵抗もなく受け入れられているのだ。もちろん卒業生の諸君もこの二年間で自分で創り上げた旗を心に持ちながら、卒業していったことだろう。

あとに残った私たちは、力いっぱい学生諸君に接したと思っているが、悔いが残らぬ訳ではない。卒業後も、私たちに厳しい批判を浴びせてくれることをもってひとまず良しとしなければなるまい。

卒業証書

フィナーレの合唱の中で手を振る岡本学長

国際会館で入学式

新入学生三八〇名

一九七〇年度京都精華短期大学入学式は、四月八日、国立京都国際会館において行なわれ、新しく入学した英語英文科一八三名、美術科一九七名の新入学生を始め、在学生、父兄、教職員及び、関係者多数が出席した。

式は「喜びの歌」で知られるベートーベン作曲第九交響曲が流れる中を出席者の拍手に迎えられて新入学生が入場して始まった。

今年の入学式の特徴は、会場を埋めつくした出席者による自由な討論会として企画されたところにあるといえよう。

卒業式の場合と同様、いくたびかの討論の中から生まれたもので平面なフロアの中央に新入生が馬蹄型に坐り、それをとり囲むように他の出席者が坐る間を、司会者がワイヤレス・マイクを持って廻り、次々と発言を求めてゆく方式。新入生の立場から大学の存在意義論、学生に対する父兄の叱咤激励の言葉、教職員から学生への注文等、従来の観念にとらわれない自由な発言が相次ぎ、中には、在学生からのヤジもみられた。

新入学生の内訳は、英語英文科一八三名、美術科、絵画コース七五名、デザインコース八八名、染織コース三四名。

なお、出身府県別では京都がやはり多く一五六名。次いで大阪の三十五名。以下滋賀（二十二）、兵庫、広島（十九）、和歌山、徳島（九）、岡山（八）、岐阜（七）福岡（六）、石川、愛媛、高知（五）が主なところである。

中野好夫氏が講演

第四回英語科講演会

英語を通して若者の教育に携わっておられる高校の先生方を中心に多くの方々をお招きして行なわれる恒例の英語科講演会が、去る六月三〇日、本学に於いて行なわれた。

今年は、第四回を迎え、英文学者として、また評論家として多彩な活躍で知られる中野好夫氏に、「今、高校教師に一番話したいこと」と題して講演をしていただいた。

約二〇〇名の高校の先生方を前に中野氏は、教師としての過去の経験から、また現在の立場から見た高校教育について約一時間にわたってその所信をユーモアを混えて講演された。

なお、同時に当日は、京都英国文化センター館長のP・マーチン氏に「イギリスと日本」と題して歴史的に観た日本と英国の過去百年間の関係について英語で講演していただき、参会者に多大の感銘を与えた。

尚、この英語科講演会は、本学英語英文科が、毎年この時期に行なうもので、第一回は柳島彦作（本学教授）、第二回はE・シファート（本学教授）、昨年の第三回は、河原林雄介氏（米国・パシフィック大学スペイン語教授）による講演がそれぞれ行われている。

七〇年度アッセンブリー・アワー

○第一回、四月十六日
「国家は必要か」
本学教授・岡本清一氏講演

○第二回、五月七日
「青春とは何か」
詩人・寺山修司氏講演

○第三回、五月二十一日
「現代日本の思想状況」
社会学者・日高六郎氏講演

○第四回、六月四日
「現代文学における終末論」
——大江健三郎をめぐって——
作家・野口武彦氏講演

○第五回、六月十八日
「技術と人間」
京大助教授・山田慶児氏講演

○第六回、七月二日
「日本の将来」
社会学者・加藤秀俊氏講演

＜フォークでサヨナラ＞

坂道

犯罪のニュースを新聞やテレビで見聞するたびに他人事とは思えないものを感じる。自分のなかにも可能性があるからだろうか▼最近、衝撃を受けたのは、瀬戸内海の客船乗取り事件である。たまたまテレビのニュースを見ていて、その光景を目のあたりにした。客船の甲板に男がじっと立っている姿がカメラにとらえられ、続いて岸壁の上から男を狙ってライフル銃をかまえる警官が映り、その直後、一発の弾丸が発射され、男は胸をおさえて倒れた▼おどろくべきことである。たしかにこの男は乗客を人質にして船を乗取り、ライフル銃を射って警官を負傷させた。しかし、だれひとり殺していない。船の乗客も生命の危険は感じなかったといっている。この男には、もう説得する余地はなかったといい、父親も射殺に同意したという。だが、いかなる犯罪者にも人権はある。それが無視され公衆の面前で射殺された。しかもテレビを通じて、その生まなましい光景が夕食時の家庭に届けられた▼これは明らかになにかを意図する射殺であり、報道である。先日、アメリカでカンボジア侵攻に反対する学生が四人、警官に射殺されたというニュースがあった。アメリカはひどい国だとおもったけれど、もはやそれは対岸の火災ではない。国家権力は民衆にむかって銃をかまえている。反抗する者はどうなるのだという、これは見せしめの射殺であろう▼責任者は急所をはずして射つように命じたという。それなら、なぜ手や足を射たなかったのか。たしかに心臓直撃ではなかった。だが男は倒れたあと一時間半で死んだ。即死はまずいが生かしてはおけないという、みごとな射撃であった▼テレビは凶悪な犯人にはやむをえない処置と報じていた。良識派の新聞でさえ、射殺に賛成する意見と批判する見解とを半分づつ載せた。いつそやの人命尊重、人道主義はどこへいったのか▼最初に犯罪の可能性は私の内部にもあると書いた。だが、この場合、銃声一発、倒れたのが私なのか。それとも射ったのが私なのか。わが内なる国家は加害者であり、わが内なる民衆は被害者である。

（笠原芳光）

総討論

第一回美術科展

第一回京都精華短期大学美術科展は、去る二月十五日から二十日までの一週間、左京区岡崎の京都市美術館で開催された。開学以来始めての卒業生を送り出す三月を控えて、卒業制作をはじめ、一年生の作品も含めて全部で四百二十一点が展示され本学美術科の今日までの成果を全面的にはじめて、世に問うたものである。

編集委員会では、この第一回美術科展をそのはじめから主体的に担って来た皆さんに集っていただき、その全てを俎上にのせて、討議していただいた。ここにその討議の大筋を御紹介しよう。

総討論・出席者（五〇音順）
麻田脩二（教員・染織）
金田辰弘（〃・絵画）
芝田耕（〃・絵画）
酒井政雄（〃・デザイン）
清水善三（〃・美術史）
新道弘之（〃・染織）
杉本修一（職員・事務局）
高島寛（教員・デザイン）
深作光貞（〃・文化人類学）
藤岡昭治（学生・絵画二年）
松味利郎（教員・デザイン）
吉富康夫（〃・デザイン）

自主展をめぐって

深作　まず総合的な問題として学生の自主展ということになっていますが、その経過はどのようなものですか。

金田　はじめ教員が企画して、途中から学生が参加し、運営もしました。

深作　学生の自主展というのはタテマエにすぎなかったのではありませんか。日本人の悪いくせで、タテマエとホンネを使いわけていると、ごまかしがでてくるのでもっとスッキリした形でやったらどうかと思います。

藤岡　僕は、はじめクラスごとに一部屋を責任をもって運営し、それが全体のものに盛り上がってゆくのだと思っていました。でも実際はちがいました。

深作　実際問題としては、一年や二年の経験であれだけの会場をこなすのは無理じゃない？

藤岡　僕はできると思います。

麻田　美術科展はもともと学生の展覧会ですから、学生が自主的にやるべきだったと思います。教師はそれをそばから援助すればよかったのだと思います。だけど、出だしがおかしくて、教師が最初に企画してしまったのであまり盛りあがらなかったのではないでしょうか。

高島　日程も場所もすでに決められている以上、本当の学生の自主展にはなり得ないのであって、あくまで学校の一つの行事ではないですか。

金田　学生の自主運営という雰囲気が出て来たのは途中からで、すべてを自主運営するというところまでまだ学生がいっていないのではないですか。

深作　本当に自主展をやりたいのなら、それだけの準備と経験と自信がいりますから、それがあったときはじめてやれば良いと思います。それが、今ない以上、学校が一体となってやるべきだと思います。

つまり、学生があれだけの大きな会場を自分達だけで運営できるとは考えられないし、先生方が力を入れられるのは当然だし、そこらをはっきりさせるべきではないでしょうか。学生が自主展をやりたい場合には、ある部屋を〇〇グループが使うというふうにすればよいと思います。全体としては、学生、教、職員が一体となって運営委員会をつくってやった方がいいのではないでしょうか。

絵画コースの場合

深作　絵画、デザイン、染織にわけて、いろいろ感想とか、批評とかを話していただきたいと思います。まず絵画から。

金田　六九年度生と六八年度生に分けたのですが、特に部屋の関係などで難かしいこともありました。六九年度生の部屋は採光もわるく、ガランとしていて良くありませんでした。

深作　観にきた人の話では、六九年度生と六八年度生ですいぶん違うということでした。つまり、六八年度生は部屋に入ったとき、トーンがみな非常に似ている。六九年度生の方は下手だけれども、個性がそれぞれあって将来が楽しみであるといっていました。

金田　それは的確な表現です。六八年度生は技術的には二年間である程度描けるようになりましたが、個性というか、特色のある学生が比較的少ないですね。その点六九年度生はおもしろい学生が多いです。それを今後伸ばしていきたいと思います。六八年度生は技術面に重点を置きすぎたようです。なぜ絵を描くかとか、そういう問題をもっと深く突っこんで考えてもらいたい。そこから入って欲しかったと思います。六八年度生と六九年度生の体質はだいぶ違うと思います。

藤岡　僕は同じだと思います。ただ、六九年度生に対する先生方の指導の態度と、学校が新しくできた時の僕らに対する先生方の態度が違っただけだと思います。僕らは、学外からそのまま持ち込まれた、技術を尊重するような教育を与えられました。そこがだんだん改まって精華のカラーがでてきて、それが六九年度生に反映してあのようなものがでてくるのではありませんか。

金田　学校では最初から技術面を重視するような教育はやっていないと思いますよ。絵というものは、それぞれのいき方がありますから、一つの線でおしすすめるというようなことは本学ではやっていません。それぞれの教師が自分のいき方をそのままぶっつけて、学生がそれをどう受けとるか、自由に受け取って欲しいという線で私自身やってきました。

学生がそれを受け取る場合に六九年度生と六八年度生でやはり差があるような気がします。私が十のことを言った場合にそれをそっくり吸収するか、あるいは五つしか吸収しないかということはやはりあると思います。

もちろん、私の言うことを全く受け取らない学生がいても、それはそれとして良いのですが、いまの六八年度生と六九年度生は、やはり吸収の仕方が違うように思います。

藤岡　確かに、そういうこともあるかも知れませんが、僕らが入ってきたころには、環境も全然ありませんでした。一年経ってそういうものが創り出されて来て、その中から僕らも何かを受けとるようになって来ました。

環境が変れば人間も変るわけですから、そんな中で二回目の入学生は変ったのではありませんか？

芝田　カラーで変ったというのはやはり一面的ですね。ただ、全般的にみれば一年次と二年次で質の差があったと思います。六九年度生の場合には基礎を一応やって絵がわかって来て、実験をやり出そうとしているような人が割りにあります。六八年度生では、そういう人はあまりなくて、九割ぐらいまがここで始めてデッサンをやり出したとか、そういう人が多い、そういう人程、先生の雰囲気に吸収されやすい。先生の言うことも良く聞く。その結果、みんな似てしまったのではないでしょうか。しかし、基礎もできていないはじめから、いきなり変ったことをやれと言っても仕方がないわけで、そこから六八年度生がどう飛びだしていくかということが、彼らの課題だと思います。そこから本格的なものが生まれてくるでしょう。

麻田　あまり若さがなかったように思います。若さはバカさに通じるところもあるので、もっと思い切ったことをした方が良かったのではないでしょうか。六八年度生が同じタイプになってしまったというのもフガイない話で、反発心がなかったら絶対ダメだと思います。あまりにそういうものが少なかった。優等生的であったという印象を受けます。

芝田　よく、ここの絵画の先生は年令を喰っているから古くさいといわれることがあるのですが、作家には年令が上だから古くさいとか、そういうことは全然ないと思います。自分が古くさいと思って絵を描いている人はだれもいないと思います。ただ、若さがないという点で言えば、第一回の学外展であるために非常に慎重でありすぎたということは言えると思いますが。

真に前衛的とは？

深作　私自身、外国に行っていろいろ観てまわったり、よく東京に行ったりして考えるわけですが、京都ではめずらしくても東京では全然めずらしくないもの、あるいは薄手のものというか、そういう〝前衛〟作品、現代的なものがあちこちに芽を吹いています。そういったものに対してどのように考えられますか。

金田　今、京都でめずらしくても東京ではめずらしくない、と言われましたが、前衛作品といわれるものは、東京よりも関西、つまり、大阪、京都などの方が一歩進んでいるという面もあります。東京の連中はどちらかというと理論が先走って行動があとになる。関西では、理屈よりもまずやろうということで、それが案外新しいということがあります。京都も古い町ですけど、古い面と先端的な面とは絶えず両立していると思います。東京は中心だから何もかも集まりますが、いわゆる植民地的な文化ではないかと思います。

関西は前衛的なものを育てる土壌があるのではないかと思います。

深作　私は前衛的なものは関西では育たないと思います。東京へいったん持っていって、そこで評価を得たものは強くなるけれども、東京から輸入したものはあまりうまくない。

金田　東京で認められたものを逆輸入してきて、こちらでまた、ありがたがるという風潮はありますね。

深作　だから、東京で何かをやったといって、それを真似することは非常に危険だと思います。自分の内部のものを本当におし出して、それが前衛になるのなら良いけれど、ただ知識的に真似をして現代風の絵を描くというのはあまり良くないのではないでしょうか。

金田　最初にやったものが前衛なのであって、真似をして、それが認められると同時に前衛ではなくなってしまうと思います。

認められないからこそ前衛なのだと思います。それが前衛の必然的な運命じゃないですか。

藤岡　京都には前衛的なものがないと言われましたが、それならこの学校から創り出せばいいではありませんか。

深作　そう、前衛的なものは自分の内部から生まれてこなければだめですね。美術科展をみた限りでは前衛風ということが観念的にとらえられているのではないかという気がします。観念的ではなく前衛的なものを自分のハートからほとばしりでるようなものにするにはどうすれば良いか、ということを学生諸君も真剣に考えて欲しいと思います。

藤岡　現代に僕らがつき当っていって、そこから芽ばえて来たものを伸ばしていけば良いわけですね。僕らは何も、東京に行かなくても、京都にいても、やはり現代と対決していると思います。

深作　それはそうですが、東京では刺激が多い。京都は少ない。

だから、京都はある意味では独善的になりやすい。ローカル現象があらわれやすい。本物も生まれるかわりに刺激が少ないのでボサッともしやすい。

藤岡　その刺激を与える役割を先生にして欲しいと思います。

芝田　小学生ではなくて、もう大学生なのだから、刺激を与えられるのを待っているのではなくて先生から引き出すということも重要ですね。

それから、前衛についてですが絵画というものはまだ油絵具を捨て切れない訳ですね。それを捨ててしまったところから前衛を出発させるか、油絵具の材料でもって前衛的なものになろうとするのかということがあると思います。

近頃ではすぐ、前衛というと新聞紙をはり付けたりして変った材料を使うことによって逃げてしまうというところがあります。もちろん、それを否定しているわけではありませんが、油絵具を使って前衛的なものを表現しようという動きが世界的にも高まって来たように思います。油絵具で前衛を創り出していくという面を京都の精華で発展させてゆきたいと思います。

深作　キャンパスと油絵具という尺度を堅持するという点では例えば、ピカソとかモジリアニはアフリカ芸術の影響を受けながら、その尺度を守ることによって面白さが出たわけですね。尺度を守るという考えもあるし、それを破るという考えもあるし、その点をきちんと意識した上でやればおもしろいと思います。それからもう一つ、先生方の絵というのは力量があるから、壁にずらりと並べても間が持てるわけです。学生の絵は力がまだ弱いから、ああいった展示だと少しかわいそうではないか。

例えば、ところどころに、つい立みたいなものを配置して、もっと細分化し、キャンバスをゆっくり観させるような展示法を考えた方がよいのではないでしょうか。

金田　たしかに、そういうことはいえますね。先生が一方的に並べてしまったという声が今年も学生から出ていましたが、陳列方法は私達がいろいろ考えたわけです。

学生も、このように配列したらそれぞれの絵が引きたってくるのだなというところまで見て欲しいと思います。

デザインコースの場合

深作　つぎにデザインに移りたいと思います。吉富ゼミからいかがですか。

吉富　今年、クリエイティブ（一）とヴィジュアル（二）という風に三つのゼミに分れたのですが、展覧会をみてみると三つのゼミが非常によく似てしまったということがあると思います。

それから、学生が背のびしてしまったということも言えます。昨年来の大学紛争が影響したのかどうかは分りませんが、学生が高い次元の風刺を、全く基盤もないのにやろうとするわけです。それをやらなければ何かおかしいように思う。技術的に追っつかないのにテーマだけは高いものを望む、ということになってしまったと思います。最初に考えていたのは、デザインというものは商品のポスターでなければだめなのだという観念を捨てて欲しいということだったわけです。ところが、それが逆に強くひびき過ぎて、ポスターなんかやっているのはいけないのだ。という風潮になってしまった。

例えば、字を使わないで一つのポスターを描こうとする。しかし字を使わなければ自分の言おうとすることが相手に伝わらないという段階なわけです。

そのような学生の作品が、字を使わないことによってコミュニケーションのない作品になってしまったということが言えます。意図していたものとは違ったものが出て来たという点を反省しています。

松味　私のゼミでは、学生の方から一年間の総決算としてこの展

（次頁へ続く）

（前頁より続く）

覧会をやりたいという要望があったわけです。私としては、ヴィジュアル的なものを課題のなかに相当入れたのですが、学生のなかには自分自身の考えていることをそれでは表現できないというものもいました。そういう学生を中心として、本当に自分自身の問題としてデザインをとらえる、ということを基盤として製作したいということになって、いろいろ議論したのですが、結果的に同じような作品が並んだということだと思います。しかし、その中にはやはり、今までのように、商品ポスターというものがデザインなんだという考え方を打ち破ろうとするような新しい息吹き、人間的な意味で自分自身が生きていく、ということを基盤にしてデザインを考えていく姿勢がみられるように思います。

酒井　私の方のゼミでは写真を一つの表現手段としてやったということが特徴です。

清水　私はヴィジュアルとクリエイティブのちがいが実際に展覧会のうえにどのようにあらわれてくるかという点に興味をもって展覧会をみたのですが、区別はほとんど出ていなかったように感じられました。それで分けることが果して可能なのかということを痛感しました。ちがうようにしようしようと努力はされながら、できあがるものは同じになってしまう。そこのところをもう一度反省してみないと、二つの根本的にちがったものがあるのだという風に観念的にきめてしまって終ってしまうのではないかという気がするわけです。

深作　ヴィジュアルとクリエイティブの問題ですが、やはりわかれた以上、それをつきつめていった方がよいのではないでしょうか。

例えば酒井ゼミなどでは未来学と結びついた方向など考えていったらどうでしょうか。

酒井　今度はそれぞれのゼミでテーマを決めてやるということになっていたのです。それなのに自由作品と区別のつかないようなことになってしまったようです。

深作　私が未来学といっているのは一つのテーマを設定して、それに全力でぶつかっていくような意欲がでてきたら非常におもしろいのではないか、というような意味なのです。

金田　率直にいって一年生は問題にならなかったと思います。クリエイティブとヴィジュアルの差は私もあまり感じられませんでした。写真を使っているとか、マンガを使用しているとか、単なる技術的な差があるだけで、根本的な差が明確に打ち出されていなかったと思います。せっかく分けるならもっと明確に分けてほしい。

藤岡　デザインにしても、絵画にしても、ジャンルを分けるというのがだいたい現代に即さないのではないですか。この大学のおかしいところは全部中途半端になりかねないことだと思います。技術を教えてくれるならそれを徹底してやるべきだし、クリエイティブなものをやるのならそれに徹底して欲しい。ジャンル別に分けるのはおかしいと思います。そのいい例が展覧会でジャンルの区別がなくなっていることだと思います。

吉富　私も本質的には、分ける必要はないと思います。デザインでは特に素材を限定していないので、油絵具を使って作品をつくっても、彫刻みたいなのをつくってもいいわけです。今、分かれているのは対外的な問題ではないですか。

区別をなくすにはやはり日数がかかるから、今のところはたがいに差がなくなっていくところにむしろおもしろさを見出すべきではないですか。

金田　それではヴィジュアルとクリエイティブになぜ分けているのですか。

吉富　私はヴィジュアルというのは芸術ではないと思っているわけです。というのは、このようなものをしなければならないという制約がある。

新道　私は各ゼミの特徴はかなりでていたと思います。むしろ問題は大学全体の仕事の集中度がたりなかったことではないですか。

学生ひとりひとりがあまりやる気をおこさなかったことが問題だと思います。

杉本　私は各ゼミのちがいは主題の選び方によってでてくるので考え方のちがいによってでてくるはずはないと思います。商業ポスターでも今までの点から一歩でもぬきんでていたら、そこに創造性があるといえるのではないですか。

吉富　クリエイティブに属する私が主題を選ぶ場合、あるいは学生に与える場合、資生堂よりもよいものをつくれという風には絶対に言わない。自分の主体性の発揮できるテーマしか選びません。だから主題の選び方の中に考え方のちがいが出てくるわけです。

クリエイティブであるからというので創造という言葉を定義どおり解釈してもらってはこまります。

杉本　私にいわせればそれは好みの違いにすぎません。社会的なものを主題にするか、他のものを主題にするかということはたいした違いではないと思います。

吉富　私は必ずしも、社会的なものをとりあげるからクリエイティブだ、と言っているわけではありません。しかし、少なくとも言えることは、今のデザインの現状は、一つのものを誰かに頼まれればやらねばならない、というのがルールになっているわけです。断れば抹殺されるだけです。そこでその人の主体性が皆無になってしまうような現実があるわけです。

例えば、資生堂のポスターを創るということは、それが如何に売れるかという観点から創るということです。それはそれで良いと思います。しかし、僕はそういう考え方をとらない。製品が本当に良いものだと思えば引き受ければよいし、悪ければ断ればよいのだと思います。そこが大きな違いです。

金田　絵画とデザインとには大きな区別がある。絵画の目的は、売るために絵を描いているのではないわけです。ヴィジュアルデザインの場合には売れないポスターは価値がないということになります。良い悪いということではなくまず売れるということが第一条件です。絵画の場合には、人間の根源的なものを追求して、それを表現しようということが目的です。

そこに差があると思います。クリエイティブデザインの場合には売れるポスターという制約からできるだけ逃れて、主体性を活かしたいということがあります。ヴィジュアルの場合にはスポンサーの意向に制約されざるを得ない。

松味　ヴィジュアルデザインというのは、商業デザイン、インダストリアルデザイン、エディトリアルデザインというふうな、人間に情報を伝えていくことだと思っています。人間がものをどのように感じるのか、どういう手続きでそれを表現するのかというようなところに引き戻して人間の認識—行動にまでかえってヴィジュアルデザインというものをとらえたいと思います。

深作　今の話にもあるように、デザインというのは領域が非常に広いですね。それだけに骨の太いものがもっと欲しかったという感想を持ちます。

高島　物理的に展覧会というスペースはデザイン向きではないわけです。美術館で展示するというのは、もともと絵画の方から発達したものです。個人的には来年は美術館でやりたくないという希望を持っています。

金田　しかし、会場を如何にデザインとして活かすか、ということも面白いのではないですか。そういうものが今度でてくると期待していたのですが、立体作品のそれ程大きいものも出て来なかったし、少々期待はずれでした。

吉富　私は、来年会場を変える必要は全然ないと思います。というのは、美術館をこなし切れなかったら、他のどんなところもこなすことは出来ないと思うからです。来年は、あの美術館で今年より良いものをつくらねばならないと、むしろ考えています。

染織コースの場合

麻田　染織は、今年は一年生だけなのではじめから、できるだけ背のびしないでいこうということになっていました。

それから、展覧会を開くまではクラスの中がバラバラで、どうも連帯感が根付かない、共通の土壌がないという空気があったわけです。そういう状態を打ち破るために共同製作をするということにしました。そして、共同製作の過程を重視しました。最後の段階では徹夜で皆、泊り込んで一生懸命やり、各人の持てる力以上のものを出したと思います。だから私は、来上った個々の作品よりも、その過程で、今度の展覧会は意義があったと思います。

金田　染織はなかなか良かったと思います。染織というものは技術的にも修得がなかなか大変なのに、一年間でよくあれだけやれたと思います。

吉富　大学における展覧会では過程が如何に大切なものかということを染織の今度の経験は教えてくれたと思います。今年の展覧会の一番大きな成果は染織であったと思います。

清水　私も染織が予想外のできでびっくりしたのですが、個々人の間に力量の差があまりなかったというか、それぞれが全力を尽したというふうに感じられました。

深作　Education の意味がこの頃はワクにはめるというふうに変って来ましたが、元来は引き出すことであったわけですね。

特に美術科の場合などは、自分の世界でしか勝負できないのですから、そのことが大切だと思います。

麻田　特に美術科の場合は、教師と学生というのは教える、教えられるという関係ではなくて、同じ作家としてぶつかり合ってゆくという烈な関係に早くなりたいと思います。

深作　そろそろ打ち切りたいと思いますが、今日のこの討論会で討議したことを来年の展覧会にどう活かすかということが重要だと思います。ありがとうございました。

刊年のない図書

鈴木隆一

現状に対して不満をもったり、又はこれを改めようとする時に示す態度を反抗又は抵抗という。元来の意味は同じものらしいが、一般の使い方では前者を積極的、後者を消極的の意味に用いている。こう区別するならば歴史に現われた大事件や争乱には反抗の部類に入るものが多い。反抗は力と組織をともなう手段はほぼ一定の類型をとっているが、抵抗は多くは個人の行為であるため国により時代によって異った方法がとられている。中国における抵抗の記録は有名な伯夷・叔斉の物語が最初である。二人は周の粟を食うことを潔ぎよしとせず、首陽山に隠れ蕨をとって命をつないだが遂に餓死した。悲惨な抵抗ではあったが清廉の行為は孔子を始めとして後の人々の賞讃を得たのである。かように世を逃れて独り身を潔くする人を逸民と呼び、動機は社会や政治に対する不満とこれを正す方法の無いところから出たものであるが、この種の逸民は孔子の時代にも沢山おり、論語の中に七人を挙げている。この時期にこの種の人物が輩出したのには社会的混乱に原因があるようだ。春秋時代は丁度古代社会が崩壊する時期に当っており既存の知識や経験では世を救う途とはならず、大部分の有識者は時代の推移に委かせたが、ただ世に迎合できぬ人が身を落して逸民となったのである。不満の相手が明らかでなく而も将来に対する希望も無い時には、過去の時代に理想を求めるようになるのが普通である。この時代背景の下に一つの人生観をたてたのが老子の思想であった。人智の技巧がこの混乱を導いたと見、無為にして自然に則ることによって社会の安寧と個人の幸福が得られるとしたのである。この思想は逸民の行為に、私憤から出たものでなく時勢の批判者であるという自信を与えたようである。

漢の高祖が天下を統一した後、嫡子たる太子を廃して寵愛する庶子を立てようとした時、夫人の呂后を始めとして群臣は百方阻止につとめたが高祖の決心を変えることは出来なかった。最後に張良の意見に従って商山に住む四人の隠者に助力を請うことになった。高祖は自分の命に従わぬものは天下にこの四人だけであるのに、その四人が揃って太子に味方する以上、太子を代えること出来ぬと悟り決心を改めたという事件が史記に載っている。為政者であるならば国を念う心をもたぬものはないであろうが、ただその人が何等かの制約をうけている者であるならば、権威に屈したり、主義に拘泥して自由に意見を述べることが出来ない。高祖の家臣は史上稀に見るほどのすぐれた人物でありながら高祖の決心を止めることの出来なかったことがよい証拠である。これに較べて逸民は天下を軽しとする全くの自由人であり、而も国家の存亡に際しては主義を超えて協力する無欲の愛国心が相手を動かしたのである。何時の世にも政治の反対者はおり、逸民も近代まで絶えることがない。併しその成功の比率は少ないのであったが為政者のこれを遇する道は変わって来た。後漢書以来、歴代の正史には隠逸伝の一篇を設けて彼等の行為を表彰することを忘れなかった。その一つ、北史の隠逸伝に「逸民を挙げれば天下の人心が帰す。出処の途を殊にし、語黙の用は異なるが各々その志を述べ、皆君子の道なり」といっているが、これによれば彼等は決して化外の民ではなく、これを心服さすことが為政者の最高の目標であるというのである。つまり逸民は世論の代表、或いは行動で示した世論とも称すべきものであろう。その行動が組織されれば現代のデモンストレーションになるわけだが、彼等はまだこれには思いつかなかった。逸民のすべてが政治的関心をもつとは限らず、中にはこの世の煩わしさを厭うて世俗との交渉を断ち、隠遁の生活を送った者もあった。これは別として政治的動機からの逸民は、若しも行動によらず言論を以って自己の意見を述べる方法があるならば、より有効な抵抗の手段としたであろう。古代にはこの方法が無かった。然るに十世紀になると印刷術が発明され図書の出版が行なわれるようになった。政治的意見についての出版は酷しい制限があって全くの自由ではないにしても、ある程度自分の意見を天下に伝えることが出来るようになったから抵抗の方法も少しは変わってよい筈である。併しそのために逸民の数が以前より減ったかどうかは判らない。

前置が長くなったが、中国における図書の出版は現在に至るまで千年に近い歴史をもち図書の数量も多く種類も多様であるが、これらの図書についての知識を与えてくれるものが図書目録の役目である。ところで目録を作るに当って最も必要な事項は書名・著者と出版年の三ヵ条であることは古今変りはない。中国書では書名を欠いたものは殆んどなく却って著者名を欠いたものが間々ある。我が国および中国の古来からの目録書が書名主記入を採って来たのもこの為である。出版年を欠いたものも割合多い。三ヵ条のいずれを欠いても完全な目録は作れぬが、書名と著者名の不備は内容を重視する研究者にとってそれ程の苦痛でもあるまいし、又司書にとっても仮書名を定めたり、変名や雅名をそのまま載せる便法もあるが、出版年の欠除は事柄が数字であるだけ推測は許されず、取扱いには大変苦労する。これには書の価値を左右するものは出版の年代であるという書誌学上の基本問題が絡んでいるからである。さて出版年を欠くに至った事情は一、偶然二、悪意三、故意によるものの三通りに区別することが出来ると思う。一の場合は出版年を付けるものは発行者であり、発行者は書物の売れ行きを心配するが出版年が後の書誌学者の問題となるなどは考えてもいないことから見落すこともあろう。その他色々の事情も考えられるがいずれも偶然の理由と見てよく、そして出版年を欠いた図書の大部分はこれに属するものである。二の悪意によるものは原版にあった刊記を削り落して出版するのである。宋刊本や元刊本の残存するものは少なく古い版木の刊記の部分を削って印刷し、宋元の刊本の如く見誤らしめようという出版物が現われた。悪意が進むともとの刊記を削って別の年号を入れたり、或はその年号に合せて序文や校刊者の姓名を加えたりする。これは明らかに偽版であるが、風習は既に明代から始まっているというからその歴史は古いわけである。偽版は精々一部か二部の出版であるけれども高価で売買されるので採算は成立つようである。もっとも儲けのための偽版であるから注意が行届かず削りの跡のはっきり判るものや、全巻のうち一カ所位もとの刊記を残していて偽版であることが判明する場合もある。三はある理由から出版年を付けることを避けたものを指すが、故意か偶然かは証拠があるわけでないので従来すべて偶然によるものとして処理してきたものである。私がこれを特に区別しようとするのはこの種の図書が王朝交代の混乱期に多く現われ、出版年の欠除は政治的理由からでないかと推測されるからである。その実例として清朝考証学の開祖として知られている顧炎武の著書を挙げよう。

顧炎武は明末に生まれ壮年期は丁度明が亡びようとする時であったので、祖国復興のため活動し、たびたび死地に陥いることもあった。明が亡び清の統一後は朝廷の招聘を辞退し、講学に専念して一生を終えたのである。その大著「日知録」の原刊本（北京図書館蔵）には出版年を欠いている。学者の研究によれば清の康熙十年の出版であるという。彼の行動から考えるとこの欠除は偶然によるものでなく、明の遺臣として清の正朔を奉じまいとする抵抗の表現でないかといわれる。この書が出版される少し前から有名な文字の獄がおこり、清を誹謗する文字のある図書はことごとく焼くだけでなく、既に葬った著者の屍体を掘出して刑罰を加えるとともに、その家族および出版関係者百二十一人を極刑に付すなどの残虐を行ったのである。彼の没後ではあるが日知録もまた禁書として焼かれることになった程であるから、この時期にこの抵抗は大きな勇気と注意を要したことと思う。これと関連していま一つの実例は出版年のあるものである。清の末期に革命思想が勃興したのであるが、孫文等とともに一方の指導者たる章太炎の著書「きゅう書」がそれである。この書の出版年は当時の年号を無視して「皇漢共和二千七百四十一年」と自署している。共和とは遠い周の時代の年号であってそれ以来、中国は漢民族の国家として続き満州族たる清の支配を許さぬという強い民族意識を表わしたものである。先の顧炎武の時と異って朝廷の権威が衰えていたのでこの抵抗が出来たわけだが、これは抵抗というより反抗と呼んだ方が適当と思う。出版年の有る無しにかかわらず、これに著者の政治思想を托することは、中国における抵抗の一方法であるといってよかろう。私は司書としてこの種の図書を整理する毎に出版年にはかように著者の無限の懐いが込められているにかかわらず、目録規則に従って、味気ない西暦紀年に換算して記録をとらざるを得ないことを何時も残念に思っている。

（図書館学）

留学生の眼

ありがとう 精華短大

ルース・イングルスルード

精華短期大学での十ヵ月間を振りかえってみて、私はそこで学生としてすごせたことに対する感謝の気持で一杯です。

今、私は合衆国の大学へ帰る前精華短期大学の思い出で胸のつまる思いがします。本当に帰らねばならないことが残念でなりません。しかし私はきっと日本へ帰ってくるつもりです。そう考えると悲しみも少なくなります。

私は日本へ戻り、精華短期大学で勉強したいかどうかを最初に尋ねられた時、私にはそんなことは考えられないことでした。

私は宣教師の娘なので長い間日本で暮し、大学へ行くためにアメリカへ戻ったばかりでした。そこでの一年の生活は大変楽しく、実りの多いものでした。そのような時、精華にいた私の良き友達のカレンが彼女の帰った後私を紹介してくれましたが、私は合衆国での楽しい生活をあきらめる気持になれませんでした。

しかし私は未来の計画や目的を真面目に考えた後、私は東洋の文化に興味があったので精華での一年はその研究にとってすぐれた機会になるだろうと思いました。

私は多くの尊敬している人達の忠告を受けて精華へ行くことを決心し、そこで一年間学ぶことを決めたのです。

一九六九年九月初めに精華に着きました。

教授や学生達は最初から親切で実によく助けてくれました。

私は精華の環境を作っている自然の美しさに深く感動しました。言葉で言い表すことができないほど青く澄みきった空、丘のあの緑が最初に私の心を強く印象づけました。というのは私はスモッグや緑のない大きな町になれていたのです。

このような自然美の真っただ中で私は授業に出席するようになりました。

最初、主にデザイン科で勉強しましたが、後ではただ講義科目だけを受けました。

精華での生活の最も重要な部分の一つに寮生活がありました。私は日本の女子学生達とうまくやっていけるかどうか心配でしたが、それは根拠のないものであることが、到着第一日目にわかりました。

食事、入浴、雑用、雑談を通して私は人間は世界のどこにいても同じであることを知りましたし、ほとんどの女子学生と仲よくなることができたのです。

事実、二、三の女子学生は私の信頼できる永遠の友達としていつまでも忘れることがないでしょう。そしてまた私は授業を全て日本語で受けました、その結果日本語について多く学ぶこともできました。また教授の一人は大変親切に私を指導してくれました、そして日本文学研究の基礎を据えてくれました。

精華での一年の結果として、もし私が合衆国にずっといたならば光陰矢の如し、一瞬のうちに一年が過ぎました。この大学に入った時は、一切の物が目新しくなじみにくく感じたが、今はなにもかにも愛着を覚えます。

一年生の時の私は、孤独な船と同じで、大きな海で漂流していました。その時の恐怖と焦心はとても口ではいえません。しかし、一つの幸運な光が、私に道を開いてくれました。そして、私は一生懸命その光に導かれて、やっと避難港をさがしました。気がついたらその時私は、もう二年生になっていました。

その一年間の必死の歩みは、私自身にとっては驚きであり、その結果に満足しました。しかし、私はいま、防波堤まできたのであって、目的に到達したのではありません。私は大きな決心をしました。

残る一年間は昨年よりもっと頑張ろう。もっと勉強しよう。時間は意情な私たちを待ってくれないから。しかし神は万事うまく運んでくれるのではありません。波浪はまだ続いています。〝就職の問題〟――私達はこれから、この問題について考えなければなりません。これはとてもつらいことです。人生の十分の八、九は苦しみであるといわれているので、これも乗り切らねばなりません。

就職に関して、台湾の大学生達は消極的です。これは多分、男子学生は卒業後すぐ一年間兵役に服さなければならないことと、又、多くの女子学生は留学したいと思っているからです。

この二つの原因から、大学の四年生たちは、もっと良い学校や奨学金を探して出国の準備をしています。それがだめなら卒業後に、あらためて就職口を探そうとしているようです。この大学の二年生のように、いそいで在学中に就職口を探しているのとは違います。

多分、私はまだ台湾学生のような〝船到岸頭自然直〟の考えをもっているのか二年生になっても、全然関心をもっていません。しかし、級友が就職について不安げな様子で騒いでいるのをみていると勉強は卒業証書をもらうためや、就職口を決めるためにあるもののように時にはみえてきます。

こんな考え方で私の一生を決めていけば、とても悲しい結末になるような気がします。

このことを通じても、人間この世界に生きている間、自分はまず自分自身のために生きていないといけないと思います。

私はよくこの詩を吟じます。

蕣子去了、有再来的時候
楊柳枯了、有再青的時候
桃花謝了、有再開的時候
唯有日子一去不復返

朱白清作

燕はいってしまっても、またやってくる
柳は枯れてもまた芽をふく
桃の花は落ちてもまた咲くが
時は過ぎたらもうかえらない。

（小野了代訳）

就職と私

劉翠玉

光陰矢の如し、一瞬のうちに一年が過ぎました。この大学に入った時は、一切の物が目新しくなじみにくく感じたが、今はなにもかにも愛着を覚えます。

一年生の時の私は、孤独な船と同じで、大きな海で漂流していました。その時の恐怖と焦心はとても口ではいえません。しかし、一つの幸運な光が、私に道を開いてくれました。そして、私は一生懸命その光に導かれて、やっと避難港をさがしました。気がついたらその時私は、もう二年生になっていました。

その一年間の必死の歩みは、私自身にとっては驚きであり、その結果に満足しました。しかし、私はいま、防波堤まできたのであって、目的に到達したのではありません。私は大きな決心をしました。

残る一年間は昨年よりもっと頑張ろう。もっと勉強しよう。時間は意情な私たちを待ってくれないから。しかし神は万事うまく運んでくれるのではありません。波浪はまだ続いています。〝就職の問題〟――私達はこれから、この問題について考えなければなりません。これはとてもつらいことです。人生の十分の八、九は苦しみであるといわれているので、これも乗り切らねばなりません。

就職に関して、台湾の大学生達は消極的です。これは多分、男子学生は卒業後すぐ一年間兵役に服さなければならないことと、又、多くの女子学生は留学したいと思っているからです。

この二つの原因から、大学の四年生たちは、もっと良い学校や奨学金を探して出国の準備をしています。それがだめなら卒業後に、あらためて就職口を探そうとしているようです。この大学の二年生のように、いそいで在学中に就職口を探しているのとは違います。

決して起らなかっただろう私の将来について深く考えることができました。

研究だけでなく、人間について考えることを教えていただいた精華の教授や友達に対して私は感謝の気持で一杯です。

合衆国へ帰っても私の日本文化の研究を続けるつもりで今、精華を去る用意をしています。

私はどこへ行っても、いつも精華短期大学のことは決して忘れることはないでしょう。

（青谷依右子訳）

演講

職業における男と女

評論家　松田道雄

明治の女性解放

男と女の違いを職業の問題において考えたいと思います。産業社会では生産が進むにつれて、仕事の分業がさかんになり、おおくの職業にわかれていきます。

しかし、そのような多くの職業がありながら男と女の差がはっきりしています。女性が自立して、公然と職業がもてるようになったのは、日本では明治以降のことですね。それまでにも女性の職業はあったが、独立した人間の職業といえるものではなかった。

江戸時代の女性の職業をみてみると、芸者、料亭の女中、乳母、女郎などです。江戸時代の女性の職業を知るためには、『柳多留』という川柳の本が参考になりますが、そのなかに、「銭の無き下女に尾籠つくようになり」というのがあります。男は金のあるときは女郎屋に行くが、金がなくなると下女を相手にするようになるという意味です。

つまり女性は自立した人間ではなかった。男性の奴隷であったということです。明治になって、その女性を解放しようとした二つの勢力があります。一つはキリスト者、もう一つは社会主義者です。明治のはじめのキリスト者は体制に対する思想的な批判者であったといってよいでしょう。

近代日本の政府をつくったのは明治維新の際、脱藩した侍、長州や薩摩の下級武士でした。彼らは今までの幕府の封建制度に反対して、明治の革命を行なったのです。そういう人たちが権力の座について、まずやろうとしたことは外敵から日本を守ろうということであった。そのためには手段を選ばない。公的な問題に関しての道徳はありましたが、私的な問題についての道徳はなかったのです。

この武士に私的なモラルがないということを批判したのが福沢諭吉です。福沢に『品行論』という著書がありますが、このなかで彼は一夫多妻ということを否定しています。のちに明治政府は「教育勅語」のなかで、個人の道徳、男女のモラルなどに関し、「君に忠に、親に孝に、夫婦相和し」といっていますが、けっきょくは法に触れなければ、あとはなんでもよいという態度でした。

それに対し、キリスト者は一夫一婦を守らないのはモラルではないといった。明治のキリスト者というのは興味ぶかい存在だと思います。明治のキリスト者のおおくは幕府方の武士のなかで疎外感をもった人たちです。彼らは儒教のモラルである「仁」の思想に立っており、その儒教を通してキリスト教に入っています。内村鑑三、植村正久、小崎弘道などですね。キリスト教こそ「仁」のモラルを生かすものだと考え、そしてその観点から、男性も女性も神の子としては平等であると考えた。

明治のはじめに女学校をつくったのはキリスト教の宣教師で、明治三年に築地にA六番女学校というのができた。明治二十年頃までに三十くらいの女学校がつくられて、日本人がつくったのは厳本善治の明治女学校が明治十八年で最初です。

自由民権主義者の女性観

このような女性解放にデモクラシーの思想のおこりがあると私は考えています。よく自由民権運動が「演説」という新しいコミュニケーションをつくりだしたことにはじまるのではないか。これはいまでいえばグループ・サウンズのようなものですよ。（笑）みんなが演説をする。小学校の生徒まで演説をする。自由民権運動です。いかにうまく演説をするかということですね。その演説運動のスローガンとして「自由」ということを主張したのだな。現代でいえば「ベトナムに平和を」というのがスローガンになっているのとおなじですよ。自由民権主義者が自由について知らないのは、ベ平連の人がベトナムの地図も書けないのと似ている。（笑）

その自由民権主義者とキリスト者がいっしょになって女郎屋の廃止を訴えた。女郎屋というのはいまの競馬、競輪みたいによくもうかるから、なかなか廃止しない。女郎屋を道徳的に悪いといえたのはキリスト者だけです。自由民権主義者は、女郎屋は道徳的には悪いかも知れないが、存在するのはやむをえないという。外聞が悪いというぐらいで反対したのです。

植木枝盛というのは自由民権主義者で廃娼運動をした人ですが、その廃娼演説の原稿を女郎屋で書いた。（笑）福沢諭吉も、女郎屋がなくなれば男はなにをするかわからんから必要だ。ただし女郎買いをやるならこっそりやれといった。（笑）森鷗外も反対していません。軍医総監であった鷗外は、兵隊が梅毒にかかると困るから、女郎屋は必要だ。しかし人身売買はよくないから、中間業者を排して、警察が女郎屋をやればよいといっています。（笑）

こんな話をある中学生にしたら福沢諭吉は「天は人の上に人をつくらず」といったと聞いていたのに、あなたは福沢諭吉のイメージをこわしたといっておこりました。（笑）

戦後、女性は平等になったか

小田実は古今東西人間チョボチョボ論といって、どの国でも昔から人間というものはそんなに変らない、おなじようなものだという説を唱えていますが、私は古今東西男女チョボチョボ論で、（笑）男と女はそれほど違わない、おなじであるという説です。

ともかく女が自立できないということが、男に従属する理由ですから、職業をもって経済的に自立することが先決です。昔は男の道徳と女の道徳は違うと考えていた。そして女は一夫一婦の道徳を強いられていました。その思想は貝原益軒の著といわれる『女大学』などにあらわれています。

明治以来、戦後に至るまで、女性の職業の種類は少く、その地位は低かった。管理的な仕事にはまったくつけなかった。高等官になれたのは医者だけでした。戦後になって新憲法でようやく男女同権になったのです。そして戦後、第一回の衆議院選挙のときには女性代議士が三十九人も出ました。

しかし日本が経済的に復興するにつれて、男女の格差がまた開いてきた。現在、大学では文学部に圧倒的に女性が多い。だから女性は文科的な能力しかないかというとそうでないでしょう。それなのに理学部などに女性が勤めていても、計算のような補助的な仕事ばかりやらされています。学術会議には女性のメンバーは一人もいません。

大学ばかりでなく、役所でも工場でも女性の地位は男性より低い。おもに男だけを働かせることによって、現在の一夫一婦制が保たれているといってよいでしょう。男は毎朝、満員電車にゆられて会社に出かけます。そして週刊誌のエロ小説を読むくらいがささやかな放蕩で、家に帰ると奥さんと子供にサービスして、翌朝また新鮮な労働力として出かけていく。（笑）

マイ・ホーム主義の功罪

こうして働いていると、やがてはカラー・テレビが買えるようになるでしょう。ついには町から離れた不便な場所に小さな家ぐらい建つかも知れない。（笑）女性のほうでも男性が家庭のためによく働いてくれることに感謝する。マイ・ホーム主義ですね。

もっとも奥さんもパート・タイムで働く人が増えています。そういう人に、働いて得た収入をなにに使うかと尋ねると、教育費が足りないからとか、車を買って旅行するためとか答える。つまりマイ・ホームを楽しむために働いているのです。しかし、そういう奥さんに主人の月給がいまの三倍になっても働くかときくと、それなら働かないという。けっきょく働かざるをえないから働いているのです。

冷凍庫がもっと家庭に普及すれば、家事労働はさらに軽減されるでしょう。家事は夫が会社でしている労働よりもはるかにやさしい仕事になる。おそらく将来も男性の労働時間はあまり短縮されないでしょう。しかし女性はすでに家庭のなかに解放区をもっているのですから、その時間、空間をどう生かすかが大きな問題です。

一夫一婦制が守られて、男性がマイ・ホーム主義に徹すれば徹するほど、女性の地位は安定します。男性はつねに体制によって抑圧されていますから、やがて革命を考えるようになるでしょう。これからの女性の課題は、保守的な家庭のなかにいながら、いかにして男性の革命的思考に対処するかということになる。（笑）

それはなにも女性が現在の保守反動に加担しておればよいということではないでしょう。なんらかの新しい道があると思うのですけれど。（拍手）

質問　この間の東大闘争で母親が出てきて、息子たちの革命的な言動に妙な批判をしていましたが、どう思われますか。

松田　母親は最終的なところで革命的になることは困難でしょう。しかし一般的には満員電車につめこまれている男性より、家で冷凍食品をもとしている女性のほうがものを考える力は増すでしょうから、大学問題についての理解も父親より母親のほうにあるのではないか。しかし最大の問題は彼女の守っている家庭と体制との関係はどうなるかということですね。

質問　マイ・ホーム主義は国家権力に対決するものとなりうるかどうか。体制のほうがマイ・ホーム主義をつくりだして政治に関心をもたせないようにしている面と、家庭のほうが国家より大事だというマイ・ホーム主義が権力への批判となる面の両方があるように思いますが。

松田　もし徴兵制というような強い権力の出方があれば、夫や子供が大事だという強い思想になるでしょう。しかし現在の日本の国家権力はそのことを考えて徴兵制までは行なおうとしていない。体制と家庭とが均衡する状態を巧妙につくりだしているから、マイ・ホーム主義を反体制の拠点にすることは困難な状態ですね。

（これは一月二十二日にアッセンブリー・アワーで話していただいた講演の要旨です。文責は編集部にあります。なお、写真は京都新聞社提供）

編集後記

『木野通信』第二号を企画した頃、木野の里には雪が散らついていた。現在、うだるような暑さの中でこれを記している。その間、三千院の桜も、八瀬のつつじも、詩仙堂のあじさいも皆、音も無く散っていった。第一回目の卒業生を送り、第三回目の新入生を迎え洛北・木野の里が、かつて経験したこともなかったであろう、あわただしく、不協和音の乱れ飛ぶ数ヵ月を私達の学舎はそれに提供した。夏――多くのものはそれぞれの郷里に散って今はいない。

不協和音が全ての地方を席捲している。その中から、珠玉の旋律が生まれ出ることを期待しよう。

（銀）